慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	略年譜 山本和郎
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1999
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.50 (1999.) ,p.71- 74
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	退職者紹介 : 井関利明教授, 小谷津孝明教授, 山本和郎教授
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000050-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

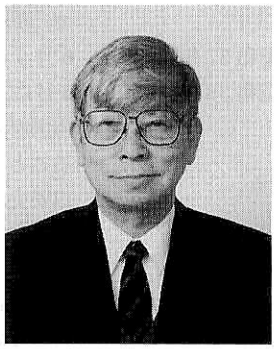
The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

退職者紹介

井関　利明 教授

小谷津孝明 教授

山本　和郎 教授



略年譜

山本和郎（やまもとかずお）

昭和10年（1935）　2月6日　新潟市に生まれる。父和一。母キミ。

昭和16年（1941）　大田区赤松小学校入学。

昭和20年（1945）　新潟県中蒲原郡浦木村の母方の親戚の家に疎開。終戦後，11月に東京の赤松小学校が開校されると同時に帰京。

昭和22年（1947）　3月，赤松小学校卒業。4月，新制中学第一期生で大森六中に入学。その当時はまだ校舎がなく，2つの小学校の理科室や工作室を借りていた。
2年目に新校舎が出来た。

昭和25年（1950）　大森六中を3月に卒業。4月に都立小山台高等学校に入学。高校時代は生物研究班やバドミントン部に所属。

昭和28年（1953）　3月に都立小山台高等学校を卒業。父が東京工大にいて電子工学をやっていたことで自分も電子工学でと東工大を受験するが失敗。浪人中に宮城音弥の「心理学入門」を読み，心理学がやりたくなる。また，その当時，夢日記を書き続け「夢」の意味などに興味を見出した。

昭和29年（1954）　東京大学文学部に入学。駒場時代は心理学研究会に参加し，駒場祭で戸川行男の「性格類型」をもとにタイプ・テストを作り好評を得た。2年生の夏休み，クロッパーのロールシャッハ診断学を読み，マニュアルを作り大学の隣にある駒場小学校の6年生ひと組を借りロールシャッハテストを施行した。その担任の先生と結果について話し合ったことが発端でテストだけではなく心理治療の問題に関心を持つ。
駒場ではフランス語のクラスにいた。担任は朝倉先生。同級生に大江健三郎がいて，よく渋谷で酒を飲む。

昭和31年（1956）　本郷の文学部心理学科に進学。卒業論文ではGSRを使った条件づけをテーマにした。宮城音弥先生の研究室で実験をやり，東工大の学生を被験者に使った。指導教官は八木免先生だった。他に，相良守次先生，梅津八三先生，田中良久先生などがおられた。大学の外では，水島恵一先生（現文教大学学長）が品川児童相談所におられ，そこで臨床心理の研修生にしてもらう。

昭和33年（1958）　東京大学大学院人文科学研究科心理学専攻修士課程に入学。臨床心理にますます興味をもち，教育学部に教育相談室を，当時の助手の村瀬孝雄氏が作ったのを機に，相談室の一員になりカウンセリングの訓練に励む。一方で，文学部では，意味微分法の日本語版を開発し，日本語の因子分析のヴァリマックス回転のプログラムがわからず，丁度その時来日したオスグッドに計算を頼み，日本語因子の命名までやってくれて，それをもとに英文の論文を書いた。修士論文は，「判断事態におけるてがかりの機能の研究」であった。Ⅰ部は理論編で，Ⅱ部は確率てがかりによる学

習実験，Ⅲ部で臨床診断過程の研究をやり，ロールシャッハ・テスターの診断てがかりを数量的に解析した。

昭和35年（1960）　東京大学大学院人文科学研究科心理学専攻博士課程に進学。博士課程に入学からはもっぱら臨床心理学に関心がますます傾き，研究も心理治療過程の分析をすすめた。越智浩二郎君と共同で「治療関係スケール」を作成し，カウンセリングの面接過程を測定した。もっぱら，カウンセリングの面接テープを聞き「うなずき」一つきくだけでどの程度の面接か分かるくらいになった。「診断的理解と治療的理解と両者の関係について」という論文は，私の臨床家の基本姿勢の表明でもあった。博士課程の終わり頃，ハーバード大学大学院でアシスタント・シップをもらい大学院に入学が決まった。しかし，後でアシスタント・シップでは大学院の入学金も払えないということで，その当時金もなく入学を辞退したことがあった。

昭和37年（1962）　6月9日妻文子と結婚する。山本家の2階に住まわせてもらう。

昭和38年（1963）　3月に，東京大学大学院人文科学研究科心理学専攻博士課程を単位取得退学をし，4月から，市川市国府台にある国立精神衛生研究所の研究員（厚生技官）となる。佐治守夫先生の勧めで入所することになる。当時の国立精神衛生研究所は，カウンセリングの佐治守夫，ロールシャッハの片口安史，児童精神衛生の玉井収介がいて，臨床心理のメッカだった。そこで手がけたのが，分裂病者に対するカウンセリングの試みとTATの研究であった。TATの研究は，みすず書房の異常心理学講座第二巻心理テストで「TATかかわり分析」として発表される。

新築の官舎に入居させてもらう。

昭和40年（1965）　科学技術庁の在外研究費が突然もらえることになり，マサチューセッツ州のウエルズレー人間関係サービス機関に地域精神衛生の研究員として米国に1年間滞在する。この機関がハーバード大学医学部の訓練機関だったこともあり，ハーバード大学のリサーチ・フェロウとなった。当時の米国は，1963年にJ.F.ケネディが「地域精神衛生センター法」を議会で通し，国策として地域精神衛生運動が盛り上がっていた。ウエルズレー人間関係機関でコンサルテーションの方法を学んだ後，ハーバード大学の附属病院であるマサチューセッツ総合病院で危機介入法について実習を受ける。その後，ジェラルド・キャプランのいる医学部の地域精神医学研究所でキャプランにコンサルテーション理論について講義を受け，地域精神衛生ワーカーとしての訓練を受けた。分裂病者のカウンセリングをやっていて，病院内での改善はできても，地域社会に患者が出ていった時，その受け皿が問題であることを知った。そこでコミュニティ・ケアをどうしたらよいのか関心を持っていた時，米国で地域精神衛生のことが学べたのは幸いであった。この1965年に米国でコミュニティ心理学が旗揚げされたことは知っていたが，まだこの頃は，地域精神衛生のことで一杯だった。

8月20日，長男，哲郎誕生。

昭和41年（1966）　11月に帰国。研究所の中で地域精神衛生研究班というプロジェクトを開き，諸外国から帰ってきた精神科医，社会学者，ソーシャル・ワーカーと地域生精神衛生の実践研究にのりだす。

昭和42年（1967）　9月に，市川市の小・中学校の教師を相手に「学校精神衛生コンサルテーション・プログラム」を開設する。また，加藤正明部長の主催する「都市生活における精神健康に関する研究」に参加する。生活環境ストレス尺度を考案する。

9月に，東海銀行嘱託カウンセラーなる。平成9年2月まで。

昭和43年（1968）　1月29日，次男恒郎誕生。

昭和44年（1969）　ハワイ大学，東西センターから研究費をもらい，社会科学研究所の特別研究員として赴任する。そこでは，「精神病院における患者役割意識」の日米比較をした研究を発表。またハワイの高等学校の生徒を相手に，性的同一性に関する日米の文化差について研究する。共に英文で研究成果を発表する。1月から6月までハワイにいた。もうひと月研究費をもらえたのだが，日本で学会闘争が起こり急きょ帰らなければならなかった。

昭和45年（1970）「自閉症児とその親たちへのソーシャル・サポート・グループ」を結成。始め4人の自閉症児からはじめたが，一番多い時は20人にふくれあがった時もある。幸い東京近辺の大学からボランティア学生が多数集まってくれた。「ピッポ」の会と呼んでいた。自閉症児だけを連れて夏に合宿にゆくのが最大の行事だった。ともかく自閉症児の治療をめざすのでなく，ゆっくり発達する子どもをゆったりと見守り，少しでも成長のお手伝いをしようという目的で始めた。

昭和46年（1971）市川市教育研究所教育相談室，嘱託。昭和57年3月まで。

昭和47年（1972）千代田区教育研究所教育相談室，講師。平成10年3月まで。

昭和48年（1973）実家の敷地に新宅を建築して，官舎を離れ新居に移る。

昭和49年（1974）日本グループダイナミックス学会（広島大会）で「コミュニティ・アプローチと集団力学」の話題提供者として呼ばれた時，九州大学の安藤延男氏に会う。そこでコミュニティ心理学についての本格的な研究会議を開催すべき時期であることを確認した。

昭和50年（1975）第一回コミュニティ心理学シンポジュムを九州福岡で開催。このシンポジュムは23回続いた。

昭和51年（1976）目黒区守屋教育会館教育相談室，講師。

昭和52年（1977）9月に3週間，学事振興資金により，アメリカ合衆国ロサンゼルス地区の一世老人を対象に面接調査に出かける。老人研究をしていた斉藤和子氏の手伝いをした。その研究の途中ハワイ大学に寄り次の年行くことになっていた東西センターの研究費の交渉に行った。

千代田区政功労賞をもらう。（千代田区教育相談室講師に対して）

昭和53年（1978）11月より4月まで，ハワイ大学，東西センターの専門研究員として文化学習研究所に出かける。ここでは比較文化研究の方法等学び，地域精神保健サービスに関する日米比較研究のデザインを企画してきた。

昭和47年4月に主任研究官になり，昭和52年9月には心理研究室長に昇格している。

昭和55年（1980）4月4日，父和一永眠。71歳。

昭和56年（1981）国立精神衛生研究所退職。4月1日に慶應義塾大学人間関係学科人間科学専攻教授に就任。実は4月1日に研究所をやめている。1号俸違うと退職金が大分違うからである。その当時の文学部長の三雲夏生先生に「税金泥棒」とお叱りを受けたのを思い出す。

練馬区教育研究所教育相談室，講師。

昭和57年（1982）東京都衛生局生活環境部「騒音保健対策分科会」より研究費をもらい「近隣騒音の研究」を第1年度に行なう。この研究費はその後10年間にわたり続いて出たことにより，「環状七号沿道住民の心理社会的ストレスの研究」として何度も調査をし，環七沿道住民ストレス尺度の開発を行なった。それが平成7年度から東京都でやっている環七沿道住民の健康社会調査に用いる尺度として採用された。

さらに，集合住宅ストレス調査も実施し，都内の集合住宅や多摩ニュータウンの集合住宅の調査を行なった。

昭和57年（1982）慶應義塾大学大学院社会学研究科委員に就任。

昭和60年（1985）50歳までに書き上げると約束した「コミュニティ心理学」の出版原稿を誕生日の前日に東京大学出版会に提出する。翌年「コミュニティ心理学—地域臨床の理論と実践」として出版される。

昭和61年（1986）慶應義塾大学学生総合センター学生相談室室長になる。

昭和61年（1986）厚生省保健政策局の「ストレス懇談会」委員になり昭和62年3月まで，国民のストレスについて懇談をする。

昭和62年（1987]この年4月より，昭和64年3月まで，厚生省保健政策局のストレス研究委員として，国としてのストレスの定義を決めたり，「休養のすすめ」として厚生省から出された指針のパンフレット作りにたずさわった。

昭和62年（1987）3月15日，慶應義塾大学慶應義塾賞が著書「コミュニティ心理学—地域臨床の理論と実際」に授与される。

昭和 63 年 (1988)　財団法人臨床心理士認定協会の評議員となる。
平成 元 年 (1989)　10 月 20 日，母キミ永眠。81 歳。
平成 2 年 (1990)　住宅都市研究所で「超高層住宅の居住環境に関する研究」会の委員として協力する。
財団法人日本健康文化振興会評議員，学術顧問になる。
平成 4 年 (1992)　日本・精神技術研究所心理臨床学院，心理開発センター，顧問。
「心理検査 TAT かかわり分析」東京大学出版会から出版。
平成 6 年 (1994)　4 月，脳梗塞で荏原病院に入院。5 月末退院。
平成 7 年 (1995)　住宅・都市整備公団，住宅総合研究所の「集合住宅と健康に関する研究委員会」委員となる。
長期信用銀行の嘱託カウンセラーになる。平成 10 年 3 月まで。
社団法人精神衛生普及会，常任理事となる。
福祉法人いのちの電話，評議員となる。
山本和郎・原裕視・箕口雅博・久田満編「臨床。コミュニティ心理学」ミネルヴァ書房から出版。
平成 8 年 (1996)　東京都衛生局生活環境部「騒音保健対策分科会」委員となる。
平成 9 年 (1997)　11 月にまた脳梗塞で荏原病院に入院。12 月末に退院。
平成 10 年 (1998)　労働省「精神障害等の労働認定にかかわる専門検討会」委員の委嘱。
日本・精神技術研究所，心理臨床学院学院長を引き受ける。
平成 11 年 (1999)　住宅金融金庫「住まいと文化」懇談会委員に呼ばれる。
第一回コミュニティ心理学会が東京府中で開催される。
平成 12 年 (2000)　慶應義塾大学文学部教授定年退職。慶應義塾大学名誉教授になる。
4 月より，大妻女子大学人間関係学部人間関係学科社会心理学専攻，教授に就任。
第二回コミュニティ心理学会が福岡で開催される。